

佐藤精一郎と東京医学院

樋口 輝雄

日本歯科大学新潟生命歯学部 医の博物館

明治20年代、東京府神田区に東京医学院や仏教博愛館病院を開設した佐藤精一郎は、嘉永6年(1853)1月、米沢の近郊・置賜郡赤湯村(現・山形県南陽市)に生れた。明治11年に東北各地を踏査した英人旅行家イザベラ・バードは、置賜盆地を「アジアのアルカディア」、赤湯を「エデンの園」と賞した。精一郎の詳しい修学歴は不明だが、父玄甫の代に赤湯温泉の一角で医業を行うようになった。米沢藩では幕末期に洋学が興隆し、「東北の長崎」と称揚されたが、藩校興譲館に医学所を付設し、医生たちに『全体新論』『婦嬰新説』など、英医Hobson(合信)の書により西洋医学を教授した。

精一郎は明治初年に医学修業のため出京する。奉職による医術開業免状下付願に添付した履歴書(東京都公文書館蔵)によれば、明治6年に文部省医務局に勤務し、陸軍軍医部や東京府病院で医師として奉職したのち、同11年には5か月間ながら下都賀郡栃木町の栃木医学校監督を務めた。12年3月から18年9月まで東京大学御用掛を拜命。医学部事務掛の典籍掛に任用され、この時期にイギリスのA. S. Taylor(泰魯兒)の法医学書“A Manual of Medical Jurisprudence”を訳し、三宅秀の校閲で司法省蔵版『医家断訟学』3巻を刊行した。同書については本学会の小関恒雄氏が講究されており、英米系医書からドイツ語医書への転換期、精一郎は職務と訳業等を通じて医界の泰斗の知遇を得た。明治14年には東京大学医学部本科への入学希望者に予備学科を教授する「医学予備校」を神田同朋町に開設。同21年に東大医学部別課と甲種医学校の学課課程に準拠した「私立東京医学校」を設立し、その後「東京医学院」と改称する。都公文書館所蔵の開学文書では、同校は敷地約300坪、校舎167坪余、3年課程で生徒定員は300名、教員は12名と記載しており、教員には医学士馬島永徳と広瀬佐太郎、東大医学部別課卒業の古川筆造が名を連ねている。またこの頃に赤湯村の甥・憲三を東京に伴ない訓育した。のちに済生学舎に学び官立金沢医科大学長を務めた生化学者の須藤憲三である。

そして明治23年(1890)には、仏教病院の設立を陸軍軍医総監の松本順とともに発起した。キリスト教に対抗して仏教界からも慈善病院設立を企図した経過について、中西直樹氏は『仏教と医療・福祉の近代史』の中で、当時の仏教系新聞と雑誌記事をもとに詳述されている。同26年(1893)6月25日に東京医学院構内に竣工した仏教博愛館病院は、来賓300余名が参会し開院式を挙行した。関連記事は『東京医事新誌』や『中外医事新報』に掲載されているが、松本順が開院の主旨と沿革を弁じ、帝国大学総長加藤弘之、医科大学教授三宅秀はじめ、杉浦重剛、武昌吉らが演説した。仏教界からも各宗の高僧が祝辞を寄せ、最後に佐藤精一郎が「各宗派諸大徳及び朝野貴紳の来臨と懇篤なる祝辞とを辱うし、不肖精一郎奚ぞ感戴に堪えん。精一郎不敏なりと雖も自今身を本事業に委し、…仏教の功德を周知せしむるを力め以て本日の光榮に答えんことを期す」と答辞を述べた。

この仏教博愛館病院は、長野県に分院設立を計画したが「経営陣の不始末があり、さしたる実績もあげぬまま同28年(1895)12月に廃止された」という。精一郎の次男富士は生家の養嗣子となり赤湯村で医業を継いだ。演者の母方の祖父で、家に残る口碑では曾祖父・精一郎は東京での学校経営に躓き、債鬼を躲すため爾後は公的な場から隠遁したという。しかしその経緯は詳らかではなく、公文書館資料等をもとに、東京医学院や仏教博愛館病院での事蹟について報告したい。

なお、長女「とく」は従兄である須藤憲三に嫁し、長男幹治は京都府立医学専門学校を卒業、大正4年宇都宮市日野町で佐藤外科医院を開院する。精一郎は後年、「精一」そして「精」と名を改め、昭和5年(1930)に宇都宮で没した。終戦後、医院は幹雄院長が承継し、現在は私の再従兄弟・佐藤俊介氏が佐藤病院と改称して宇都宮市で父祖の業を継がれている。